



言霊は宇宙の究極の実存である。

蛇足を添えるが、自己と世界の宿業から離脱する道に二つの階梯がある。第一段は「空相」に帰えることで、仏教、キリスト教はそのための教えである。煩惱、妄想を捨て、或はそれをそのままに承認する時、その煩惱が生かされている無限の「空」の世界が打解される。般若心経が説く「五蘊皆空」老子の云う「無名」の世界であって、「空」とは空間的無限と時間的永劫を事実、現実として把握する事である。

第二階梯は此の無名、無限の空相に立脚して、その中におのずから躍動している生命の律動リズムをその始原の形態に於いて捕え、これを人間の言語を構成する原言として把握表現することである。その内面の生命の原律の表現である言語の展開が即ち人類の文明である。空に還えれば一応個人の宿業、既成観念からの離脱を獲る。然しその儘の無内容な広漠たる無限の広がり「空」からは文明は

生まれて来ない。その空だけの悟りの境涯は辟支仏としての真仏から区別されている。法華経化城喩品は第一の階梯者である辟支仏から真仏である種智（摩尼）の把持者としての第二階梯への修練の道を説き見つけさせている。万物の実相は「空」から生まれ出て、生命の先天的知情意そのものの現われであるが故に、五色、五蘊、五識、を具備具現しながら、そのままに無垢清浄であって、宿業に汚染されることがない。「無名は天地の初め、有名は万物の母」、老子は此の二つの階梯を斯く明快に説いた。

× ×

人間の心すなわち霊のひらめきと、その霊自体の自己表詮である始原の言語とは不二一体である。故にこれを言霊ことだまと云う。言にして霊であり、霊にして言である、人間精神の活動は本具の摩尼の活動である、摩尼の活動は即ち言霊の活動である。

過去を問わず、未来を云わず、言霊こそは今此処(中今)に生きて活動しつつある人間性の実体、本質であって、これが人類の文明すなわちすべての哲学、歴史、科学の恒常の出発点であり、拠点である。この言霊に基礎を置かぬ限り、文明は広漠たる無限の「空」で中を初めなく、終りを知らず、徒らな彷徨いたづら ぼうこうを続ける。

言霊は宇宙の究極の実存である。その奥に更に神や仏や或はより以上の真理実在をまさぐろうとしても人間には不可能である。言霊こそ人間に現われた神であり仏であり最奥の真実であって、此処までが人間の可知の限界である。限界を超えた思惟は虚数を弄んで徒らに空転するだけである。像法、末法の信仰の対象としての神や仏は人間を指導するために、言霊の内容を概念や表象(像・画)と云う方便を以て向うに描いて示した仮の目標、指月の指に外ならない。(つづく)